

居ル場夢

NO 密で濃密なアルバム制作

清水 愛乃
作・絵・監督

目次

1章 企画者誕生

01 はじめに | 7

きっかけとか何とか／目的

タイトル・サブタイトル／ルール

02 オンラインの食卓を囲む | 9

カップラーメンを啜る会

参考文献

03 おかわり | 13

おにぎりを食べる会

気付き

2章 やりたいことを

01 フィクション企画 | 17

参考文献／ルール

02 念願の鍋パーティー | 20

計画／アルバム調理工程

03 運動会 ————— 24

〈メイドインデザイン〉

04 マエケンコラボ
芋掘り ————— 28

05 また会えなくなる!?
雪だるまつくろう ————— 30

06 突然サヨナラ
緊急卒業写真 ————— 32

07 卒業研究制作展
Tanks bite ————— 34

3章 最後に

01 結果／考察 ————— 38

02 参考文献／スペシャルサンクス

1章 企画者誕生

01 はじめに

きっかけとか何とか／目的
タイトル・サブタイトル／ルール

02 オンライン食卓のを囲む。
カップラーメンを啜る会／参考文献

03 おかわり
おにぎりを食べる会／気付き

この研究の初めは、ジメジメとしたものだった。なんとなく居場所が欲しいと思い、居場所を見つける為の研究がスタートした。居場所は「家族」「仲間」といった場所にあると思っていたのだが、探しているうちに居場所を見つけることよりも、その間にあるプロセスや人との関わりの方に価値があると思った。「NO密で濃密なアルバム」な「居ル場夢」の制作の中で、今までは見えなかった、見てこなかった自分の周りをぐるりと見渡す研究が始まる。

あと1年しかないのに…

残り1年の学生生活を迎える私たちは例年と違う学校生活を送ることになった。新型コロナウイルスの影響で授業はオンライン式になり、学校へも通っては行けなくなった。当然友達にも会えず、1人での時間がほとんどだった。そんな中でも、やっぱり人と繋がって居たいと思った。そこで、卒業研究の中で自分が「企画者」になり、参加者を集い、一緒に楽しい事を増やしていけば良いと考えた。そこで、離れていてもできる思い出をつくろうと考えた。その思い出を集め、「NO密で濃密なアルバム」を制作する事にした。

NO密で濃密な アルバム

「居ル場夢」というのは、私が居場所探しをしていた時に付けたタイトルである。アルバムが出来上がるまでの過程や様々な人やモノとの関わりの中に居場所はあるのではないかと考えて付けたタイトルだ。目的は変わったが、居場所があるアルバムを通して、人と繋がり思い出を造っていく、という意味でタイトルはそのまま「居ル場夢」、そしてサブタイトルは「NO密で濃密なアルバム制作」とした。ただ、アルバムを制作することが大きな目的ではなく、アルバム制作は、繋がるための手段として行っていく。

アルバム制作の過程の中に居場所がある

イ ル バ ム

居ル場夢

NO密で濃密なアルバム制作

居ル場夢の制作を通し、人との繋がりや思い出をつくる

みんなが家にいて、会えない状況でも繋がる企画を探した。先生からのアドバイスもあり、まずはみんながオンラインを通して、昼ご飯を食べることにした。オンライン授業が実施されるようになってからお昼ご飯はほぼ毎日1人で食べるが多かった。だから、まず私にとって嬉しい企画だった。また、授業で使っているZoomを通して「同じ釜の飯で、オンラインの食卓を囲む。」というのを目的にした。参加者は強制はせずメールやLINEで参加したい人だけ参加してもらうという形にした。このオンラインを通してのランチタイムは2回行った。それぞれ、告知方法や内容を少しずつ変えていき、どういう内容の企画をしたらみんなが楽しいのかも考えることにした。

・「食べる」企画

・Zoomで開催する

・毎回の企画で参加条件を決める

・参加者と楽しく過ごす

・参加者は数じゃない（落ち込まない）

企画者のルール

カップラーメンを 啜る会



カップラーメンを啜る会

場所
Zoom

時間
12:00~12:40

2020.7.17

カップラーメンが食べれる人
写真を記録として残しても良い人

目的 同じ釜の飯で オンラインの 食卓を囲む。

同じ釜の飯…ここで、カップヌードルが登場する。同じ食品メーカーが作った同じカップラーメンを食べれば、生みの親元が同じな為同じ釜の飯を食べたことになると考えた。参加者に日清食品株式会社「カップヌードル」を用意してもらった。企画名は「カップラーメンを啜る会」。顔を合わせて、みんながカップラーメンを啜るのは、中々にシニールで楽しそうだった。



私の予想

最初の企画だし緊張するな…。
何話そう…お湯タ
イミグ揃えるの
難しそう…。まあ
でも、いつも学校
で一緒にいてくれ
る友達は来てくれ
るはず、うん、
告知1日前はやっ
ぱり急だったかも
…。

02 オンラインの食卓を囲む

カップラーメンを啜る会

なかみ

予想人数の倍の人が参加してくれた。仲の良い友達の他、クラスメイトや先生と一緒にカップラーメンを啜った。お湯を入れるタイミングも、食べ終わるタイミングもバラバラだった。みんな笑っていた。

参加人数 8人



結果

目的である、「同じ釜の飯でオンラインの食卓を囲う。」ができた様に感じた。学校に行けなくなつてから、家で1人で食べる事が多くなつたので、誰かと顔を合わせながの食事が久しぶりだった。オンラインではあるが人と食卓を囲うことの楽しさが味わえた。



参考サイト

「目的をもち、意図をもつて設定と設計をし、言語および非言語で表現し、人と対話する技術をもち、自らふるまい、場に反映させていくことで、はじめて人に伝わり、人と共有できる価値が生まれ、その人らしい場づくりができてきます。」*

どうすればより良い場が作れるか、場づくりのやり方を調べている時、「場作りを成功させるための5つの鍵」と言うサイトを見つけた。今まで、場づくりをする方ではなく、そこに参加するだけの身だったので、どの様に場をつくるか意識していたことは無かった。しかし、右の抜き出しの言葉を読んで、ただの場所づくりではなく「人と共有できる価値」が生まれる場所づくりを心がけるきっかけとなった。

居場所の鍵



また「鍵」と言う部分は使えそうだと思った。企画を行う「証」として、またはそれが思い出の居場所となるものを目指した。その「鍵」を見た時に一目で何の鍵かわかるように、その企画にあった鍵にした。今回は、「カップラーメンを啜る会」だったので、麺と謎肉や卵、エビ、ネギなどの具を具上に乗せ、カップラーメンがモチーフになるように鍵を描いた。

*「場作りを成功させるための5つの鍵」
<https://terakoyagaku.net/group/bazukuri/>



これら全てがコミュニケーション

超感銘！まさに理想の繋がりが像

先生から勧められ、1冊の本を読んだ。『つながるカレー』という本だ。この本は、著者である、加藤文俊、木村健世、木村亜維子の3人組みがカレーづくりを通して、人と繋がっていくというものだった。カレーづくりの為のキャラバンと共に見知らぬ街へ行き、カレーづくりを始める。今まで何も無かったところに急に見知らぬ3人と謎のキャラバン、そしてカレーの香り。気になって来た人たちが話かけてくれる。一緒にカレーづくりをする人、ただその場で完成を待つ人、その場を通り過ぎる人、様々な人たちがいた。完成したカレーは、無料で配ってみんなで食べる。全く知らない場所、カレーづくりをする事でそこから様々なコミュニケーションが生まれていく。そんな

先生から勧められ、1冊の本を読んだ。『つながるカレー』という本だ。この本は、著者である、加藤文俊、木村健世、木村亜維子の3人組みがカレーづくりを通して、人と繋がっていくというものだった。カレーづくりの為のキャラバンと共に見知らぬ街へ行き、カレーづくりを始める。今まで何も無かったところに急に見知らぬ3人と謎のキャラバン、そしてカレーの香り。気になって来た人たちが話かけてくれる。一緒にカレーづくりをする人、ただその場で完成を待つ人、その場を通り過ぎる人、様々な人たちがいた。完成したカレーは、無料で配ってみんなで食べる。全く知らない場所、カレーづくりをする事でそこから様々なコミュニケーションが生まれていく。そんな

先生から勧められ、1冊の本を読んだ。『つながるカレー』という本だ。この本は、著者である、加藤文俊、木村健世、木村亜維子の3人組みがカレーづくりを通して、人と繋がっていくというものだった。カレーづくりの為のキャラバンと共に見知らぬ街へ行き、カレーづくりを始める。今まで何も無かったところに急に見知らぬ3人と謎のキャラバン、そしてカレーの香り。気になって来た人たちが話かけてくれる。一緒にカレーづくりをする人、ただその場で完成を待つ人、その場を通り過ぎる人、様々な人たちがいた。完成したカレーは、無料で配ってみんなで食べる。全く知らない場所、カレーづくりをする事でそこから様々なコミュニケーションが生まれていく。そんな

おにぎり 食べる会



おにぎりを食べる会

おにぎりが食べれる人
写真を記録として残しても良い人

場所
Zoom

時間
12:10~12:50

2020.8.6

目的

それぞれの味で
オンラインの
食卓を囲む。

カップラーメンを啜る会は、同じものを食べ、同じ時間を共有することで、オンライン上ではあるが食卓を囲む事ができた。だが、みんなが同じ時間に顔を合わせて食べるだけで、時間や気持ちと同じ様に共有できると考えた。そこで今回は用意がしやすい「おにぎり」をみんなが食べることにした。具やおにぎりの数は指定せず、参加者各自が自宅で自由に握ったものを用意してもらい、おにぎりと共にオンラインの食卓を準備をした。



私の予想

前回の反省を生かし、告知を3日前にしたから参加人数は増えそう！みんなでおにぎりの具の紹介し合ったら楽しそう…自分から話を振って賑やかな会にしたいな。

03 おかわり おにぎりを食べる会

なかみ

人数が増えることを予想していた為、あらかじめ「おにぎりの具紹介」をみんなにしてもらい、この場が暖かい雰囲気にすることを目指した。「そんな具あるの!」「それ、美味しいよね〜」などの会話があった。普段あまり絡みが無い人同士の会話が合った。

結果

普段話さないクラスメイト同士が会話しているのを見て嬉しさを感じた。人数で成功かどうか決まるわけでは無いが、人が多いというのほそれだけ話題も広がるので、3日前に告知をした事が用意しやすい食べ物にした事が人数を集めることにつながった様
に思う。

参加人数 12人



感想、意見をもらう

おにぎり食い大会の感想

とても楽しかったです！
普段話すことがあまりない人も会話をすることができて、新鮮でした 最高の企画です

また、ご飯(おにぎり)と一緒に食べるのが最高です
そもそもご飯食べることが好きでわくわくするし、みんなのおにぎりの具を教えてもらうのが楽しかったです、おいしかったです！

自粛期間、お昼とかは自分一人で食べることが多かったのでもみんなと食べれることはうれしいです

これからもとてもたのしみです
鍵もとてもたのしみ

～感想～

今回、私は前回のカップラーメンの時に参加したかったけどカップラーメンが家になくて参加できなかったりベンジと、おにぎりだからいつも身近にある白米に自分の好きな具を入れて気軽に用意できるしいいな〜と思い参加しました。

食の会当日までなんの具にしようか考えるのもとてもワクワクして楽しかったし、参加してみて最初は何話そうか緊張しまくってたけど、あいの様自身が話をふってくれたり、全体的な雰囲気も本当に良かったので、みんなの輪に安心して入れた(?)みたいで嬉しかったし楽しかったです。

あと、いつもあんまり喋らない子の話も聞けて自分の輪が広がったように感じ嬉しかったです。

次、もし何かパーティがあったら個人的意見ですが、デザインの子は絵を描いている子が多いイメージなので、みんなで何かを描いたりする会とかあっても面白そうだな〜と思いました！

「良ければ、感想とか意見送ってくださいと嬉しいです。メール待ってます!」と伝えたら、実際に届いた。参加者にとっても良い思い出がであつたようで、企画側として嬉しかった。



居場所の鍵

今回はみんなでおにぎりを食べたので、おにぎりをモチーフにした鍵にした。ご飯を鍵状に敷きつめ、実際にみんなが持ち寄ったおにぎりの中の具材である、海苔、明太子、梅干し、枝豆、高菜などの具材を描いた。

オンラインでの、リアルな企画

みんなで話しながらのご飯は楽しいね！

でも、画面上に枠のような仕切りがある…

無くなるのもっと一緒にいる感じするかも？

集まる？

けど、密になりたくない

全てやったことにしたらどうか…、写真だけ撮る感じなら…？

対面でのフィクション企画

後期から、対面授業がスタートした。今まで通りの生活ではないが、みんなと一緒に生活できることになった。しかし、学校生活が再スタートしたからといって、例年通りイベントや企画をする訳にはいかなかった。新型コロナウイルスの影響もあり、マスクをしていても、近い距離で話し、触れ合うことは危険だと考えた。その中で、どうやって繋がって、思い出を作ろうか。そしてここから、新しい居ル場夢の企画が始まる。オンライン授業時にみんなでご飯を食べた時、顔を見ながらの食事が出来たのは良かったのだが、あの個人を仕切る画面上の「枠」がとても気になった。人数が増えれば増えるほどその「枠」も多くなる感じがなんだか悲しかった。対面授業が始まり、次の企画からは「枠」がないような写真が欲しいと考

えた。密を避けながらあ、枠のない写真が欲しい。そして思いついたのが、企画も写真も「やったことにする」つまり、フィクションを作り上げることだ。フィクションを交えたアルバムを制作する。企画の参加者を集い、その企画にあった格好、ポーズ、表情をしてもらう。写真を撮る時も、密を避けるため、1人ずつ個人撮影をする。その写真の参加者と背景を切り離し、参加者を同じ空間に、同じように楽しんでいるかのように見せる写真を作ろうと考えた。密にならなさそうな企画は実際に行く。その思い出も、この状況だからこそ、思いついた「フィクション」で、普段なら行けない場所に連れていったり、あり得ないをあり得ることにしたなど、より楽しい思い出にしたいと考えた。

2章 やりたいたいことを

01 フィクション企画
参考文献

02 念願の鍋パーティー
計画／アルバム調理工程

03 運動会
くメイドインデザインく

04 マエケンコラボ
芋掘り

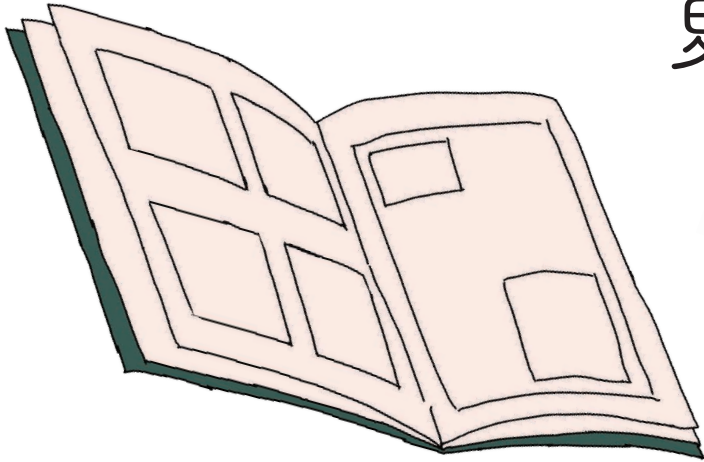
05 また会えなくなる!?
雪だるまつくろう

06 突然サヨナラ
緊急卒業写真

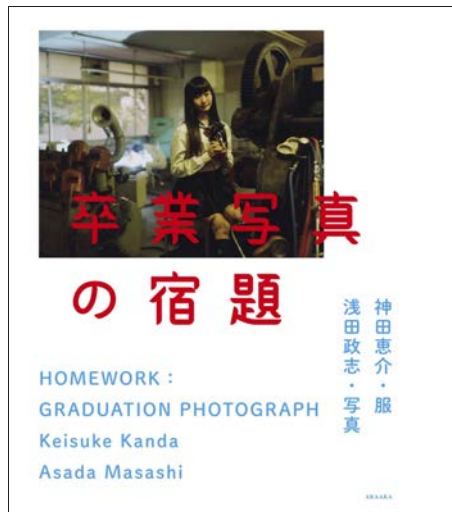
07 卒業研究制作展
Tanks bite

今までは、企画をやった証として「鍵」を描いていた。しかしこれからは「写真」が証そのものになる。「鍵」よりも、捏造した写真そのものの方が、より繋がりを感じられると考える。

証、変更



深い思い出の詰まった居る
場夢にするために、参考文献
を探した。企画、内容、ストー
リー、写真、の全てが載せら
れている本を先生から紹介し
て頂いた。



「卒業写真の宿題」
浅田政志・写真 神田恵介・服
赤々舎 2014
https://www.amazon.co.jp/dp/4865410139/ref=sr_1_1?__mk_ja_JP=カタカナ&dchild=1&keywords=卒業写真の宿題&qid=1612491874&s=books&sr=1-11

この本は「ケイスケカンダ」
主催・ファッションデザイナー
神田恵介と、写真家・浅田
政志と普通の高校生たちとが
タグを組んで作ったアルバム
である。「ケイスケカンダが好
き」というだけの共通項で集
まった、高校生たちが参加者
になっている。高校生たちは
学校に普通に通っている子もい
れば、留年していたり、拗れ
ていたりなど様々だった。そ
んな高校生たちの一生の思い
出にもなるようなアルバムに
なっている。ケイスケカンダの
制服を着て、浅田さんがシャッ
ターを切る。高校生たちの様々
な記憶に更に素敵な思い出が
上書きされている。写真はそ
の時のその瞬間出来事、人物

や風景など様々なものを残す
のにとっても最適な手段であ
る。私もこの『卒業写真の宿
題』という本のように、今し
か写せない、私たちの思い出
となるアルバムを作ろうと考
えた。

取り入れたこと

- ・ 学校行事をする
- ・ 思い出をつくるアルバム
- ・ 「共通項」ケイスケカンダが好き
- ・ 「共通項」企画に参加したい ←

対面授業がスタートし、みんなが学校にきている。誘える人は沢山いるのだから、やりたいことをやっていくことにした。企画者ってここが楽しい。ルールの中だったらなんでもできるのだ。今まで出来なかったことや、例年のイベントなどをより楽しくするために、企画を考えた。

今回も、「企画者ルール」としてこれだけは守ろうルールを決めた。企画者として、企画中に参加者や自分も密にならないよう気をつけた。

・やりたいことをやる

・密を避けること

・毎回の企画で参加条件を決める

・参加者と楽しく過ごす

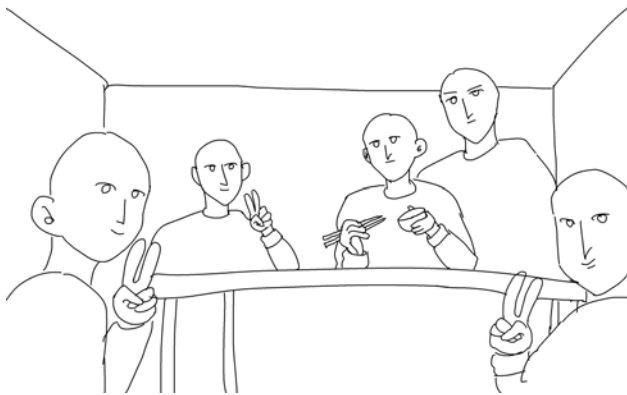
・参加者は数じゃない（落ち込まない）

企画者のルール

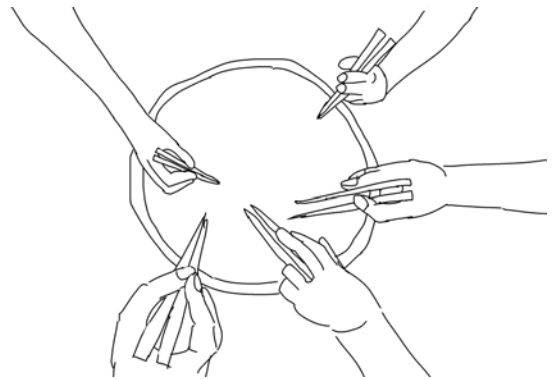
念願の鍋パーティー

1番最初にみんなでやりた
い事は決まっていた。「鍋パー
ティー」である。1回生の冬に
先輩方が開いてくれた鍋パー
ティーに参加させてもらった。
それが本当に楽しくて、卒業
研究が終わった2回生の先輩
方のやりきったぞと言うよう
な表情が今でも忘れられない。
この鍋パーティーに憧れて、来
年は主催者側で参加したいと
思っていた。密になり、直接
的なふれあいも避けられない
為、実際には開催できない企
画だが、この研究をもってこい
の企画だ。初のフィクション企
画の為、手始めに前田研究室、
通称「マエケン」の学生で鍋パー
ティーを開くことにした。今
までは「予想図」を描いてい
たが、今回からは理想図を描
くことにした。

理想



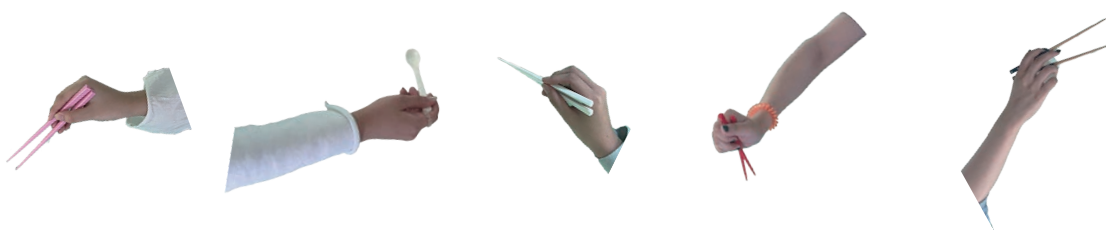
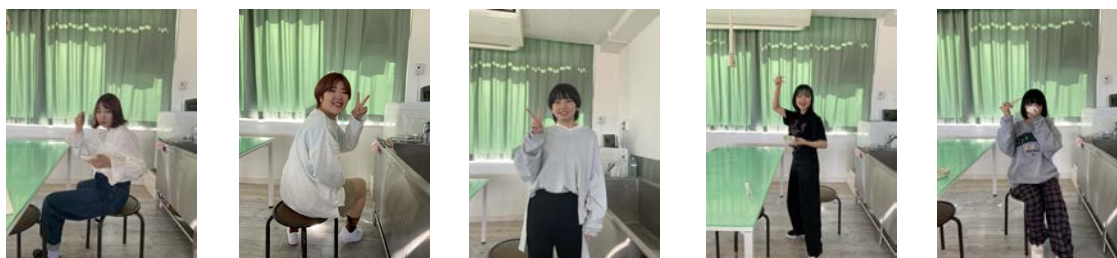
みんなで同じ鍋に
手を出して具材の
取り合いでもし
ちゃおっかな〜笑
鍋は去年先輩が開
いてくれた鍋パの
写真があるしそれ
使わせてもらおう



「はいはい、こっ
ち向いて〜写真撮
るよ〜!はいチー
ズ(カシヤ)」み
たいな写真が欲し
いな〜!合成でも
一緒にいるみたい
になるといいな
〜!

材料

1911003<イトウ産>……スプーンを持参,テンションが高い
1911009<近藤産>……最近仲良くなった,君の参加とても嬉しい
1911015<しみず産>……企画者,本当は普通に集まりたかった
1911017<タカ嶋産>……箸に海苔が付いているので見ないで欲しい
1911023<野路産>……急な箸の持ち方の癖,次は Qyuu もな
手……5つ
鍋……去年の「鍋パーティー」のもの,魚介と肉団子が凄い
机……301の教室のモノ,懐かしい去年の教室



写真切り取り工程

1. 個人撮影

参加者を呼び出し撮影
私と二人きり
コンセプトにあったポーズや
表情をしてもらう
iphon カメラを使用



2. 切り抜き

背景を透過させる
Photoshop を使用

黒部分
背景



3. 完成

出来上がり



同じ工程で切り抜いたよ！
あとは合成するだけ！

念願の鍋パーティー



10月7日(木)

今日、お友達との決れど

サヨナラを告げ、鍋パーティーをしま

した。みんなが持ち寄った具材

ばかりで鍋が溢れたので、いつも

の鍋と一味違う鍋に

なりました。鍋を食べて

から、卒業研究の話を

しました。私が持ってきた

肉団子が取り合いになり、

どっか、スープを出してま

たり、はじめて持ち寄ったおめし

なったり、みんなで大爆笑

しました。先生、守貞をこ

とっく、お友達とみんなが

いました。またしたです。

日記も描いてみた！うんうん！楽しそう！！

鍋パーティー大成功！

(やってないけど)

～メイドインデザイン～

次は何しようか考えたところ、高校生最後の体育祭は中止になったと言う事を思い出し「運動会」を開催することにした。ここで同じゼミの高嶋さんとコラボし、彼女の couturbish* の研究の中で作られたハチマキを運動会で使わせてもらうこととした。ハチマキを見るまでは、普通の運動会っぽいものを開催する予定だったが、自由によって欲しいとの依頼をし出されたハチマキがまるでメイドさんがつけていそうなヘットドレス風ハチマキだったので、運動会のコンセプトはメイドになった。そしてこの運動会に参加できるのは、デザインを学んでいる人たちのみとした。テーマは、作る「made」とメイドを掛けており、デザインで作られたと言う意味が込められている。

フィクションだからこそ出来る運動会！！



距離を開けての撮影



*「couturbish」

高嶋さんの卒業研究では「ごみをゴミとしない服作り」をしていて、実際に服を作った時にでたごみからまた新たな服を作っている。今回のハチマキもそのごみから作られたものである。

～メイドインデザイン～選手名簿



池田選手



大槻選手



飯田選手



谷根選手



加畑選手



道下選手



布川選手



芥木選手



高嶋選手



伊藤選手



本田選手



志尾選手



近藤選手



坪内選手



東選手



清水選手



野路選手

宇宙での競技に向けて、無重力準備体操をしました。地球にいる時よりも、身体が軽く、元気に体操することができました。



宇宙は広い会場だったので、広々と競技ができました。



地球の上はちやうど良い休憩スポットになり、月の上は、ホコホコして走りにくかったです。

最後に、団体競技の組

体操をしました。バランスをとるのは難しかったです。全員

がメイドの底力を出し切り、見事

成功しました。いい思い出です。

😊



なかみ

1回生が3人、2回生が14人の計17人が参加した。思っていたより参加者がいた。広告や声かけで呼びかけをして、撮影は体育館で行った。「走って」「体操して」などの指示をして、細かいポーズなどは参加者にお任せした。

写真作りをしている時、体育館やグラウンドでやるのは普通な感じがした。捏造だからどうにでもなるし、どうせなら絶対にはできないところでやりたいと思い宇宙で開催した。写真の背景である宇宙は手描きしたものを使用した。発想次第でどこにでも行くことができる。

結果

私のアルバムに載りたい、企画を楽しみにしていた、という人が企画に参加してくれて嬉しかった。その反面、メイド服を着てみたいから参加した、友人に冷やかされたから参加をしたような参加者もいた。私の企画は、本当に参加した人だけ参加するものだ。『つながるカレー』の中でも、カレーのキャラバンを見ても興味のなしい人は通り過ぎて行った。企画者側の立場になって見ると、そうやって参加者が厳選される事も、参加者のまとまりや良い場になるのではないかと思った。企画の告知方法も、その時のルールも緩過ぎず、縛り過ぎないものをもう一度見直すことが必要だと感じた。



私の役割

ゼミの先生から「来週、芋掘りするから。」と告げられた。正直、芋掘りと卒業研究になんの関係性があるのか、始めは全くわからなかった。一見なんの関連性もなさそうに思ったが、これを自分たちの卒業研究と関連付け、この「芋掘り」に対して自分は芋掘りやゼミのメンバーみんなに対し、何ができるか。と言う課題だった。みんなですべてのことに取組、全員が役目を全うすることで、協働性が育まれる。リアルではあり得ない写真とストーリーを作る。

材料

1911003<イトウ産>……芋掘り脱色Tシャツを作ってくれた、農業者アイテム無料レンタル

1911009<近藤産>……農業者になれるタトゥーを作ってくれた、一緒に田舎娘になれたわね

1911015<しみず産>……農業者兼思い出増幅屋さん（自称）

1911017<タカ嶋産>……もんぺを作ってくれた、涼しいもんぺだった

1911023<野路産>……Qyuu を連れてきた、Qyuu は芋が大好きらしい

顔……5人分（芋になるもの）

芋……リアル ver, 手描き ver

青空……手描き



芋掘り

11月11日(水)

私たちは、田舎の

芋掘り専門の学校に通っています。

そして今日も芋掘りをしました。いつも通りに芋を掘っているよと、

なんと、自分たちに

どっくりな芋がでてきて

おどろいて、私(お転ん

で)しまいました(汗)

なんだか怖かったの

で、その芋たちは、おす

と分けコーナーにて、配

りしていただきました。今日も私

たちはハッピーな芋カールです。



なかみ

みんなが自分ができることを持ち寄って芋掘りをした。同じゼミの子たちが制作したモンペや脱色Tシャツを着て、顔にペタペタタトゥーシールを貼って田舎の農業者のような芋娘になれた。Oyuuには今回おさわり禁止だったようなので、触れ合えていない。小さい芋から大きい芋まで様々だった。芋を2週間寝かしつけ、その後自分たちで調理して食べたり、おすそ分けコーナーにて配ることになった。その際のポスターを作ることになり、あたかも壮大な農場で作ったようなポスターにした。その後、青空を手描きにするなどの改良を加えた。

結果

出された課題に対して、みんなが計画を立てて実行することは、スケジュールを合わせたり、みんなのことを考えることも必要になる。1人でやるより、考えたり手を動かす量も増えるが、その分楽しさも増すように感じた。出来上がったポスターが飾られたことも嬉しかった。みんなの持ち寄ってくれたモンペ、脱色Tシャツ、タトゥーシール、Oyuuのお陰で楽しい芋掘りになった。

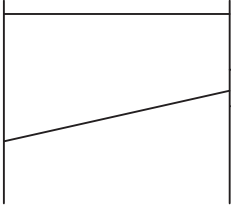
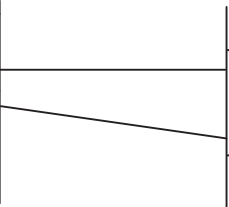
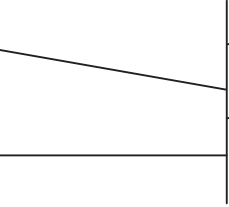
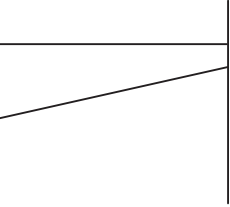








芋おすそ分けコーナー
実際に持って帰る人がいて嬉しくなった！

05 また会えなくなる!?
雪だるまづくり

後期に入ってから毎日学校に通っていたが、また、学校に行けない自体になってしまった。誰も予想していなかった、大雪である。卒業研究の最後の大詰めはこの時期に学校に行けないというのはかなり厳しいものだった。どこにも行けない為、また家に閉じこもるしかない。家の周りの雪かきか1人で出来ることを淡々とやるだけの日の中で、「はやくみんなに会いたいな」と思った。そこでまた「会えない状況」を活用するプチ企画を考えた。それが、みんなで雪だるまをつくることだ。好きなように、雪だるまをつくってもらってそれをLINEで送って貰うように頼み、集まった雪だるまたちを並べることにした。

雪だるまあみだくじ

・清水	・五十嵐	・伊藤	・飯田	・木下
				
				

また会えなくなったという事から、衝動に駆られて思いついた企画だったが、5日間の間で、私を含めて5人の参加があった。今回、初めて本人の写真ではなく、作ったモノでみんなとの繋がりを試みる企画だった。

上の写真は、実際の雪だるまたちである。面白そうなのであみだくじにしてみた。誰がどの雪だるまのつくり手なのか予想しながらやって見て欲しい。

誰がどの雪だるま？

雪だるまづくり



1月 10日 (日)

今年は新年早々、

たくさん雪が降りました。

3年振りの大雪で、学校

へも通へなくなりました。

退屈していました。暇な

ぶしに雪だるまをつくら

みよと意外に可愛く

できました。私のほぐれで

しょう？。みんなにも、

雪だるまづくりをオススメし

たり、早速つくって、家

まで持って来てくれ

ました。みんなの雪だるま

を並べてみると、家族みたい

でほっこりしました。

なかみ

5人の雪だるまを並べた。

夜に撮ったり朝に撮ったりなどの光の当たり加減の違いで同じ空間に並べても、少し合成感が強い。

結果

出来上がった写真を見て、合成感がある事で。ここ2年程、雪が降っても雪だるまをつくったり、雪で遊んだりすることはなかった。その為、私を含め参加者も、少し童心に帰るような思い出ができたのではないかと考える。みんなの雪だるまが並んだ写真を見て、雪の冷たさとは逆に、参加してくれた人たちの暖かさを感じた。

急でごめん!!

カレンダーを見て焦った。卒業研究の発表まで日が無いのに、まだやりたいことが残っていたのだ。それが今回の緊急に行われた企画「緊急卒業写真」である。今の段階では、私たちの卒業式は行われる予定らしい。だが最近はいつ何が起るかわからないかという思いをかなりしてきた。もしもの事を考えて、袴を着た卒業写真を撮りたいと考えた。卒業写真として写ってくれる参加者を集めるために、みんなが入っているグループLINEで声をかけた。写真のルールも設定した。1時間半しか、参加者を募集する時間を設けられなかったのにも関わらず、私を含め、10人の人が参加した。

ルール

- ・自分の顔写真（正面、肩より上）
- ・自撮りでも他撮りでも OK
- ・加工どれだけでも OK
- ・最近の写真でも昔の写真でも OK

9^(急)年デ組

ギリギリで企画をすると、参加者もギリギリ、企画者もギリギリ、結果的に追い詰められることになった。うくん。時間に余裕を持つことが大事だと改めて感じ、反省した。

10人に好きな色を聞いて、完全に私のイメージで袴を描いて着せた。この人は、こんなイメージで、こんな風にしたら喜んでくれるだろうか、などのギリギリな企画に参加してくれた人たちに感謝すべく、写真として仕上げた。出来上がった写真は卒業写真っぽく並べ、下に名前も記した。クラス名は、「9年デ組」この9の数字は「緊急」の「急」と掛けている。急に集まってくれた、生活デザイン専攻のクラスメイトという意味だ。

9^(急)年デブ組



タカシマ・エリ



ノジ・ユキナ



イガラシ・ナギサ



ミチシタ・ナヅキ



イトウ・メグミ



サトウ・シオリ



イイダ・ヒビキ



カワイ・モモカ



シミズ・アイノ



フジタ・ミキ

2月5日 (金)

今日は卒業式でした。
生まれて初めて袴を

着させてもらい記念に

個人撮影したものを

卒業アルバムにしても

りました。急な卒業

式だったので何人が間違っ

て赤ちゃんの姿で来てしま

う人もいてとてもおもしろい

卒業アルバムになりました。

私たち4人のリアル版卒業研究制作展のテーマは「Tanks bite」(サンクスバイト)。サンクスバイトとは、結婚披露宴で、新郎新婦がお世話になった人にウエディングケーキを、感謝の気持ちを込めて「あーん」と食べさせてあげるセレモニーだ。卒業、20歳。生活デザイン専攻での2年間の学びを得て、20歳までの感謝を「卒業研究制作展」という形で表現する。今年度は、仁愛女子短期大学に通う学生、教職員という限られた人しか、制作展を観に来ることができない。つまり、私たちの卒業研究制作展は、じんたんでお世話になった方に向けての Tanks biteである。



*「couturubbish」
高嶋が制作したワンピース

卒業研究制作展のポスターである。高嶋、伊藤、野路、清水の4人で制作した。テーマが「Tanks bite」なので、結婚披露宴の新婦をイメージした。このポスターには、勿論4人の卒業研究を取り入れている。まずこのポスターは合成だ。私の研究で毎度お馴染みの様に、個人撮影で取られた写真を合成したのだ。4人が着ているのは高嶋の研究で制作したごみから作られた白いワンピース。野路は暴れるQyuに顔を舐められている。伊藤の脱色Tシャツの脱色柄はタイトルのTの部分に入れた。



2月6日(土)

今日はホスター撮影

でした。みんなが協力して

撮影の用意をし、良

い写真が撮れました。

途中でOxunが暴れ

出してしまう、野路さん

の顔にケーキがついてし

まいました。それも良いと思

い出に当たっています。

「Tanks bite」 私たちが一番お世話になり、そして感謝しなければならぬ人…。
 そう、家族である。

「Tanks bite」というテーマを思いついた時、頭の中には家族がいた。しかし、薄っすらそんな気はしていたが、家族は展示会には来れないという現状になった。私はどうしても自分達の制作を見てもらい、20歳までの感謝をこの展示会で伝えたいと考えた。同じ様に頑張ってきた4人も同じ気持ちだった。そこで、不可能なことを可能にできる私の研究で、家族に卒業制作展示会に来てもらうことにした。



2月13 (土)
 高嶋野路ファミリー
 が来てくれました。
 「夜中までがんばって
 こんなステキな作品
 をつくっていたのね!!」と
 感激していました。
 Qmu のことも理解し
 てくれたみたいで、私も
 うれしかったです (3)



お母さん、私が「Qmu」を飼い始めた時、娘がヤバくなった…。と言ってたよね(笑)展示会の後、「Qmu」が何か変わった気がする。というのを聞けてとても嬉しかった！見に来てくれて有難う！お兄ちゃんも僕これ好き、ってコメントを気に入ってくれて嬉しかった！ありがとね！



お母さん、服の生地運ぶのとか、卒研で忙しい時期に身体の心配してくれてありがとう。お父さん、県外からわざわざ帰ってきてくれてありがとう。帰るの急いだんやろけど…。その靴スリッパやで??



2月17日(水)
 今日は、伊藤清水
 ファミリーが来てくれま
 した。伊藤父は、
 脱色服を気に入って
 「お父さんも脱色
 やってみよう!!」と言っ
 ました。私の母は、私
 がパソコンを使えな
 いからお父さんにおまかせ



お父さん、お母さん、展示会に来てくれてありがとう!お母さん、いつもブリーチ剤買ってきてくれてありがとうね!お父さん、「お父さんの服もやって」と言ってくれたね!嬉しかったよ!でも、靴下で学校来るのはやめてよ(笑)



お父さん、お母さん、来てくれて有難う!嬉しいです!家であまり卒研のこと話さなかつたけど、毎日美味しいご飯で応援してくれて有難う。お父さん、忙しい仕事の合間に時間作ってきてくれて有難う!「さすがパパの娘」って照れるな(笑) 沢山ありがとうね!

上の個人の吹き出しは、私が3人からよく聞く話から、勝手に書いてみたものだ。3人に、出来上がった写真を見せると、「本当に見に来てくれたみたい〜!」と喜んでくれた。各家族は実際には展示会にこないが、私のつくった思い出をそれぞれの家で共有し欲しいと思う。

3章 最後に

01 結果／考察

02 参考文献／スペシャルサンクス

「虚しい。」と思った。この

研究を始めたばかりの頃は、人に会うことを避けなければならぬ現状の中で、嘘でも何でも良いから一緒に居たい、例年と変わらないくらいの思い出も作っていいかと考えていた。それで満足できると予想していた。研究で制作した写真の中の私たちは同じ空間で肩を並べていたが、「フィクション」である以上、本当の繋がりとはい呼べないと感じた。どうしてそう思うのか。それは私を含め現代を生きる人たちが既に本当の繋がりを知っているからだと考える。つまり、言い切ってしまうと、偽物は本物に勝てないという結果だ。しかし、違う角度からこの研究を見てみるとまた違った結果が見えてくる。まずは「フィクション」の良さである。このファイルに目を通して、すでに感じていると思うが、私は企画者としてかなり自由に楽しく企画をしてきた。出来なかったこともあつさり出来、会え

ない人とも会える、みんなを

宇宙にだって連れて行ける。企画を考えている間だけ、まるでハリウッド映画の監督になった気分だった。そのくらい、フィクション企画は想像力さえあれば何だって出来る自由で楽しいモノだった。そして、フィクション企画の写真は全て合成である。個別に写真を撮る為、着回し、使い回しが出来、衣装も1着、物も1つで良いのだ。持ち物や準備物が減る事で、参加者も楽に参加できたのではないのかと思う。そしてもう1つ大きなことに気が付く。このご時世の中で、フィクションでも良いから繋がっていたい、と思える人がたくさん居たことである。人に会うことが制限され、その中でSNSで会話ややり取りが出来るのにも関わらず「繋がりたい」と思える人がいる。気軽に人とあえていたあの頃、私がいかに多くの人と繋がって居たのか。その人たちが自分にとって最高に価値のある繋がりを与えてく

れていた事に気が付けた。

今ここで述べた様に、片側から観れば、「繋がれなかった」で終わるものが、もう片方から見るとまた新しい結果が導き出された。考え次第ではプラスにもマイナスも捉えられるのだ。この様な捉え方も、この研究を通して身に付いた事だ。1つの研究に対し、それ以上の結果や考えが生まれる。その分成長できるなら、それって贅沢なことだ。その両方を対等な結果とし、自分の成長の糧にしていきたい。また、私は機械が苦手だったのだが、写真を捏造する為にPhotoshop、ファイル制作の際にはIllustratorをよく使うようになり、入学前よりは使いこなせる様になった。この全ての結果に満足し、研究をやった良かったと感じている。自分の小さな成長から、考え方や物の捉え方においての成長を嬉しく、誇らしく思う。

「ただのイベント好き」が、初めて企画者になった。いざ企画者側に立ってみると、企画の成功、参加人数、企画内容などの面で沢山の不安があった。だが、今回の企画の参加者は、友達、クラスメイト、面識のある後輩、教員のどれかに当てはまる人だった。企画者として生まれたてな私にとって、この参加者と企画者の関係性や距離感はとても有難く、成長しやすい場所だった。そんな小さな暖かい状況下での顔見知りの身近な参加者はまるで身内とも呼べるだろう。身内での企画は、参加者の全員に目が届き、企画者側の気持ちや、企画の意図が伝わり易い。時には、参加者からのアドバイスや意見も貰うこともあった。その意見やアドバイスを頭に入れ、次の企画の内容を考えていった。自然と参加者に楽しい思い出を提供するにはどうすればいいか考える時間が増えた。参加者の気持ちで企画をしていた初めの頃とは違い、後半では「企画者」として参加者のことも考えながら企画をするようになった。するとそれに応えるかのように、企画の間の会話や、出来事、暖かい思い出も増えていった。ここには私が投げたボールを、暖かく受け取って、投げ返してくれる人が居る。そうやって1つずつ思い出ができていく。この暖かい場所は1つの「居場所」とも言えるのではないか。居ル場夢の中の繋がりは無いと言ったが、この研究のプロセスや過程の中でできた思い出や人との関わりは、私が目的としていた「繋がる」ことと同じくらい価値のあるものと思う。この研究を通し、人と繋がることで得られる温かみや、自分の成長を知ることができた。それと同時に、私が自分と目的の間にある他人の気持ちや言葉を聞き、相手の立場を理解しようとするきっかけになったと言えるだろう。

の気持ちで企画をしていた初

これは、ノンフィクションです。

